医師山上兼輔

田中助一

日本医史学会第九一回総会が岡山市で開催されるので、岡山県出身の耳鼻咽喉科医師山上兼輔について述べたいと思う。

山上は文久二年（一八六二）二月十四日、美作国苫田郡郷村河本の庄屋西村勝四郎の二男として生まれ、佐太郎と名づけられた。四歳のとき父が逝去し、明治十五年（二十一歳）十月五日に東京に出て下谷区練塀町の共愛学舎に入り、翌十六年四月まで英学を学び、五月に東京大学医学部別課に入学し、二十年十一月に卒業した。在学中の十八年八月より同県津山出身の山上兼善の家に寄寓し、十九年十一月養子となり、二十三年十一月八日に娘淑子と結婚、二十四年十一月に入籍し、山上兼輔と改名した。

養父の山上兼善は陸軍一等軍医正（大佐相当官）で、日本赤十字社病院の創立初期、内科主任医兼庶務主任、および看護婦養成委員等の職にあって、院長橋本綱常博士の片腕となって活躍した。ことに病院の渋谷移転に際しては、その新築計画に尽瘁し、その結果当時東洋一と称せられるものができ、橋本院長の信頼に報いた。また病院商議員および日本赤十字社常議員に任ぜられ、赤十字事業に貢献した。

兼輔は明治二十年十一月大学を卒業し、十二月より当時麹町区飯田町にあった創立間もない日本赤十字社病院に入り、橋本院長の下に無給助手となって指導を受け、翌二十二年七月より有給医員（初任給八円）となった。二十二年九月初めより本郷区森川町の壬申義塾に通ってドイツ医書を学び、もって後日に備えた。

二十三年（一八九〇）橋本院長は、前年欧州より耳鼻咽喉科学を学んで帰朝した賀古鶴所（後の軍医監、森鷗外の親友）を招聘してあらたに耳科を開設し、二月十二日より診療を開始した。これが我が国における耳鼻咽喉科専門診療の始めである。そのとき兼輔は内科に在任のまま、月・水・金の午後、耳科外来診療の助手となり、専門家として立つ第一歩をふみ出した。

二十四年五月より余暇神田の賀古の病院の手伝いをし、八月よりは四谷区本村町の自宅においても診療を行った。

二十四年五月一日より新築病院の診療が始まり、九月三等助手医員内科部勤務、十一月二日より濃美地方大震災の負傷者救護のため派遣され、二十七年の日清戦役に際しては、九月十五日は病院より陸軍予備病院医員として広島に派遣され、二十二日より翌二十八年六月十八日まで傷病者の救護に活躍した。

二十八年十月四日耳科部兼務を命ぜられ、二十九年七月十五日三陸地方の海嘯罹災者救護のため医長心得をもって派遣され、二十九年九月十日内科部勤務および耳科外来診察掛を免ぜられ、あらたに耳科部診察主任を命ぜられた。

三十年一月十日日本赤十字社より医学研究のため、三ヵ年間のドイツ留学を命ぜられ、一月二十二日出発、三月十七日ベルリンを経て、二十三日にミュンヘンに到着し、ミュンヘン医科大学に入学して、三十二年十二月「ドクトル」の学位を得、さらに三十三年九月ベルリン大学に転じて、三十四年二月まで留学し、その間南ドイツ地方の諸大学およびスイス・フランス・オーストリアなどへ見学旅行をした。三十四年二月二十二日ベルリンを出発し、イギリスを経て帰朝し、五月一日に治療主幹心得を嘱託されて耳鼻咽喉科専任となり、同時に自宅においても診療を行った。

三十七年日露戦役に際し、病院は臨時に東京予備病院渋谷分院となり、戦傷病者を収容することとなって活躍し、戦後その功により勲六等に叙せられた。

三十九年四月一日治療主幹を嘱託され、大正三年十二月まで在職した。日本赤十字社病院における在職期間は二七年であった。

明治三十五年四月大日本耳鼻咽喉科会総会において副会頭に推され、長らくその任にあった。また四十三年五月より大正十一年三月まで四谷区医師会長に、大正五年十月より十二年十月まで日本医師会理事に、十二年十月より日本医師会医政調査会委員に在任し、大正十三年十月二十四日医制発布五〇年記念祝典に際して医政功労者の一人として表彰された。

晩年は少しく健康を害したので、一切を止めて大正十年渋谷区幡ヶ谷に移転して悠々自適し、昭和二年(一九二七)二月二十六日朝、脳溢血発作のため急逝した。行年六十六

であった。子供がなかったので、早くから東京帝国大学総長を務めた理学博士松井直吉の子八郎を養嗣子としたが、八郎は医業を継がず、歴史を好み、「日本甲冑の研究」を行って帝国学士院賞を授けられた。八郎のこの研究には、養祖父兼善、養父兼輔二人の熱心な後援があったそうである。

（山口県萩市）

ヴェサリウスのファブリカについて

酒井　恒

ヴェサリウスのファブリカは一六五二年にラテン語で発行され、著者が所有するものは合本であり、一九六四年に復刻されたものである。解剖学の図がペン画で正確に描かれ、記号をつけて別項目として解説されている。ヴェサリウスのファブリカの図は英語とドイツ語に訳されている。しかし、英語訳書はすべての図を掲載しているが、その順序は原典と一致せず、意訳してあり、ドイツ語訳書ではその一部を訳しているに過ぎない。原典と比較しつつ述べる。図の記号は著者にはどこにあるのかわからないものがある。記号は明瞭に示すべきであると思う。そこで、著者はヴェサリウスのファブリカの図の日本語訳を試みることにした。図は本文のあいだに挿入されているものと、頁をそのために割いて解説しているものがある。本文も解説文もラテン語で書かれているので、難解である。初めに骨学